

聖書：ローマ 8：14～16

説教題：御霊ご自身の証し

日時：2021年5月23日（ペンテコステ・朝拝）

今日はイースターから数えて 50 日目、天に上られたイエス様が約束の聖霊を注がれたペンテコステのみわざを記念する日です。聖霊について学ぶのに良い箇所は聖書の中に色々ありますが、このローマ書 8 章もその一つです。1～30 節までに聖霊を指す言葉は何と 19 回も出て来ます。ですから 2 節に 1 回以上出て来る計算になります。2 年前のペンテコステの日に 8 章 1～4 節を、昨年に 5～13 節を見ましたので、今日は続きの 14～16 節を見て行きたいと思います。この 3 節の中にも「御霊」という言葉が原文では 3 回、日本語訳では 4 回出て来ます。

まず 14 節から見ます。そこに「神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです」とあります。「神の御霊に導かれる人」という言葉で皆さんはどんな人を思い浮かべるでしょうか。ある人は特殊な体験をした人、人生の様々な場面で奇しい神のお告げを受けたような人のことを考えるかもしれません。しかしここはそういう意味ではありません。日本語には訳されていませんが、原文の 14 節冒頭には「というのは～だからです」という意味の言葉が入っています。ですからこの 14 節は前の 13 節あるいはその前の部分とのつながりで読む必要があります。省略された言葉を補って 13 節後半から読むとこうなります。「しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。というのは、神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもだからです。」このようにすると「神の御霊に導かれる人」は何を意味するかがはっきりします。13 節後半と 14 節を比べて分かることは、「神の御霊に導かれる人」とは、13 節後半の「御霊によってからだの行いを殺す」人を指すということです。その前の部分、昨年ペンテコステの時に読んだ 5～13 節では、クリスチャンは今や以前とは異なる新しい霊的状态にあるということが言われました。以前までは肉に従って歩む者でしたが、今や御霊の内にある者とされました。9 節：「あなたがたは肉のうちではなく、御霊のうちにいるのです。」これがクリスチャンが今置かれている幸いな状態です。イエス様はペンテコステの日、天から聖霊を注ぎ、私たちはその聖霊を頂いて御霊の内にある者とされました。この聖霊によって最後の復活の日までの歩みが導かれるということが 10～11 節に語られました。ですから私たちは今や肉に従って歩むのではなく、御霊に従って「からだの行いを殺す」歩みへ進むべきであると 12～13 節で言

われました。これらを受けて 14 節で「神の御霊に導かれる人は」と言われているわけですが、ですからこれは何か特別な体験のことを言っているのではなく、聖化を導く聖霊に従うクリスチャンは、という意味になります。

その人は「生きる」と 13 節の最後に言われていました。この「生きる」とは真のいのちに生きるということです。罪の道を行く先にあるのは死ですが、聖霊に従って聖さへと歩む先にあるのはいのちです。人間が本来そこに生きるようにと意図された生き生きとしたいのちです。この祝福をクリスチャンが味わうのはなぜなのか。それについて 14 節は、「神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもだからです」と語っているわけです。パウロはこうしてここに新しいテーマを持って来ています。それは「神の子ども」というテーマです。私たちは御霊に従って歩む時、そこに真のいのちを経験しますが、それはただそれだけのことではないのです。パウロは、いのちの祝福は神の子どもたちにこそ用意された祝福だと言っています。ですから私たちは自らが受けている祝福を「神の子ども」という観点からも考えなければならないということになります。

さて「神の子ども」と「御霊なる神」はどういう関係にあるかが続く 15～16 節に述べられます。まず 15 節前半：「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく」。神に対する私たちの以前の関係は、ここにある通り、一言で「恐怖」で表されるものでした。私たちは不用意に神の前に出ることはできませんでした。下手に近づいたらさばかれてしまいます。ゴキブリがノコノコ出て行ったら直ちに打ち叩かれるように。それは自分にとっての死を意味します。「再び」とあるのは、以前にそうだったが、聖霊をいただいてもまたなのか？ということです。もちろんパウロはそうでないと言っています。聖霊はあなたがたを再び恐怖に陥れる奴隷の霊なのか。決してそうではないと。むしろあなたがたが受けたのは「子とする御霊」なのであると。この「子とする」という言葉は「養子にする」という意味の言葉です。ここに聖書の素晴らしいメッセージがあります。

言うまでもなく私たちは神に対してもともと「子」という身分を持っている者たちではありませんでした。私たちは神の被造物として神を父として持ち、私たちはその子孫であるという考え方がないわけではありませんが、神の子どもであるとはとても言えるような者ではありません。それどころか神に対して罪を犯し、決して御前に立

てない者となりました。もはやさばきは免れず、いつそのさばきを受けるのかビクビクしていなければならない者たちでした。しかしそんな私たちを「子とする」ことがここで言われています。これは私たちを養子としてその家に迎えることです。養子縁組は通常、家名を残したいと考える裕福な人々の間で行われましたが、私たちが心に留めるべきは 1 世紀のローマ世界で養子は実の子と全く同じ扱いを受けたことです。養子だからと言って一段低い位置に置かれたのではありません。その家の正式な子ども一人という立場に置かれ、愛情を受け、財産を相続する立場とされました。ここに「子とする御霊」とありますが、私たちが子とされるのは神に対してですから、子としてくださるのは父なる神です。しかし神は聖霊を通してそのことを導いてくださるので、ここで「子とする御霊」と言われています。

そして御霊は私たちに神の子どもの「身分」を与えるだけでなく、その「心」も与えてくださるとするのが 15 節後半です。「この御霊によって、私たちは『アバ、父』と叫びます。」 「アバ、父」という言葉は、イエス様が祈りの中で神に呼び掛けた時の言葉です（マルコ 14 章 36 節）。「アバ」はアラム語で「お父ちゃん」とか「パパ」を意味する言葉でした。子どもが親しみと信頼を込めて家庭内で用いる言葉です。ユダヤ人は神に対して決してそのようには呼びかけませんでした。そのように親しく呼びかけることは考えられないことでした。しかしイエス様はいつも「アバ」と呼びかけられました。また弟子たちにもそのように祈るように教えられたと考えられます。ですから「アバ」というアラム語は特徴的な言葉としてユダヤ人の間で保存されました。そして新約聖書がギリシャ語で書かれた時、「アバ」だけでは意味不明となりかねないため、ギリシャ語で同義語のパテールという言葉が、その説明として「アバ」の後につけられたと考えられます。ですからこの「アバ、父」は「父」という言葉がアラム語とギリシャ語で重ねられた言葉です。

私たちは御霊によってそのように神を呼ぶと言われています。イエス様と同じように！です。つまり聖霊はイエス様の救いを私たちに当てはめて私たちの罪が今や神の前に完全に赦されていること、また私たちがイエス様と結ばれて、父なる神がイエス様を愛しているのと同じように私たちをも愛して下さっていることを確信させてくださいます。その聖霊の導きを頂いて、私たちもイエス様と同じように、イエス様にあって「アバ、父」と呼びかけるのです。しかもそのように「叫ぶ」と言われています。これはこの発声为本能的、自発的なものであることを示します。聖書の教理を

論理的に考えて、確かに私たちは神の子どもとされているのだと受け止めて、心は今一歩ついて行かないけれども、一応そう呼ばせていただきます、「天のお父様？」などと、よそよそしく、半分疑いながら呼びかけるではありません。御霊に導かれて「アバ、父」と「叫ぶ」のです。「叫ぶ」とは必ずしも大声は意味しませんが、そこには思いがあふれています。御霊は子であるという「身分」だけでなく、その「心」も与えてくださるのです。

さらに 16 節には 2 つの証しのことが述べられています。「私たちの霊の証し」と「御霊ご自身の証し」です。私たちはもちろん聖霊に導かれてですが、自分がキリストを信じ、神の子どもとされていることを自覚します。その自覚のもとに神を父として呼びます。しかしそれとともにそこで御霊も証ししてくださると言われています。私が自分は神の子どもとされていることを感謝しながら、神に向かって「アバ、父」と呼ぶ時、聖霊もそこにおいて「そうだよ、あなたは神の子だよ」と私たちに証ししてくださるということです。聖霊が強力な証しを加えてくださる。それによって私たちは心からの強い確信を持たされ、益々大胆に「アバ、父」と呼んで神に近づくように導かれるのです。大事な視点はこれは特別なクリスチャンだけの話ではないということです。このローマ書 8 章で言われていることはすべてのクリスチャンに当てはまることです。私も前まではここで言われていることは良く分かりませんでした。中学 3 年生で信仰告白しましたが、大学生くらいまでは良く分かりませんでした。しかし今日のような聖書の御言葉に聞く中でだんだん分かるように導かれました。私たちが経験していることは実はそういうことだったんだ〜と。そして聖霊のみわざを感謝して受け止めるようにさせられて来ました。

心に留めて良いと思うことはウェストミンスター信仰告白第 18 章の「恵みと救いの確信について」の告白です。そこに救いの確信についての 3 つの根拠が述べられています。一つ目は「救いの約束についての神的真理」。たとえばヨハネの福音書 3 章 36 節に「御子を信じる者は永遠のいのちを持っている」と言われています。神は偽らないお方ですから、神がこのように言っておられるみことばにこそ私たちの救いの確信の第一の基礎があります。二つ目は私たちの生活に見られる恵みの内的証拠すなわち実です。地上にある間、私たちの生活に見られる実は完全なものにはなりません、それでもキリストに結ばれている証拠として何らかの実がそこに見られるはず。そこにも私たちが救いの確信を持つことのできる根拠があります。そして第三に「私たち

が神の子であることを私たちの霊とともに証しする、子とする御霊の証し」とあります。これはまさに今日の御言葉が述べていることです。最初の方で見たように、私たちは御霊の導きを単に神秘的なもの、突発的で恍惚状態に似たようなこととして考えてはなりません。もし私たちが御霊の内に自分があることを感謝せず、御霊に従わず、御霊を無視する歩みをするなら、聖書でそう言われていますように、聖霊は悲しまれます。聖霊とそういう関係にあるのに、聖霊が「あなたは大丈夫ですよ、あなたは神の子ですよ」と積極的に証ししてくださるとは考えられません。しかし一方でこの御霊の証しは、特別な人のためのまれな経験であるかのようには言われていません。16節の「御霊ご自身が・・・証しして下さいます」という言葉は現在時制で書かれていて継続的なわざとして言われています。時々そういうことが起こるかもという程度ではなく、クリスチャンの生涯全般に亘って与えられる恵みとして語られています。クリスチャンには喜びの時も、悲しみの時も、試練の時もあるでしょうけれども、それらのすべての時に、継続的に私たちを支えてくださる働きとして言われています。私たちはこのみことばに聞く時、確かに御霊がそのようにして弱い私を助けていてくださることを思うのではないのでしょうか。私たちの信仰が弱くなりそうな時も、私たちに「あなたは神の子どもとされているのですよ」と証しし、だから神を父と呼んで近づくようにと励まし、私たちが父なる神に祈る時にはそばにいて、「そうだよ、あなたは確かに神の子だよ！」と強い証しを加え、いつも傍らで私たちの信仰生活を支えてくださっている聖霊の働きを。

私たちはこの御霊ご自身の証しをただいたずらに求めるのではなく、聖霊に導かれて、その方に従う歩み全体との関わりの中で求めたいと思います。御霊は私たちがみことばに耳を傾ける中で、祈る中で、聖書に示された神の御心に従う歩みの中で、この喜ばしき確信を私たちに与えて下さいます。その御霊ご自身の証しを益々知り、御霊に感謝する者とされたいと思います。そしてこの御霊によって慰められ、支えられ、強められて、やがての最後の救いの日に至るまで、ただ恵みによって導かれる神の子どもたちの幸いな歩みへ進みたいと思います。